

# 畑の祭

北原白秋

青空文庫





山景

## 崖の上の麦畠

真赤なお天道てんとうさんが上あがらつしやる。やつこらさと

鍬を下ろすと、ケンケンケンケン……

鶺鴒みそつちよめが鳴きくさる、

崖がけの上の麦むぎ畠ぼたけ、

天気は快よし、草つ原ばらに露がいつぱいだで、

そこいら中ぢゆうギラギラしてたまんねえ。

九右衛門くゑもんさん、麦は上作だんべえ、

蚕そらまめ豆もはぢきれさうだ。

ええら、いい凧おれだな、沖ぢやまだ眠つてゐるだが、俺おれちの崖の下は真蒼だ、

——そうれ、また、さらさら、ざぶん、ざぶん、んん……

尖<sup>と</sup>んがり岩に波がぶつかる、  
怖<sup>おっ</sup>かねえほど静かぢやねえかよ、  
まるで、はあ、鮑の殻見たいにチラチラするだね。

南風<sup>はえ</sup>が吹きあげる。

やれ、やれ、今日<sup>けふ</sup>も朝つばらからむんむんするだぞ。

何でも構うこたねえ、

胸をづんと張りきつてな、うんとかう息を吸ひ込んで見るだ。

熟<sup>う</sup>れ返つた麦の穂がキンラキラして、

うねつたり、凹<sup>くぼ</sup>んだり、

扁<sup>ひらべつ</sup>平<sup>へい</sup>たく押<sup>お</sup>つかぶさると、

阿魔女<sup>あまつちよ</sup>でも、何でも、はあ、圧<sup>お</sup>つ倒してやつたくなるだあ。

真赤なお天道さんが燃えあがる、

雲<sup>うみ</sup>がむくむく燥<sup>わめ</sup>き出す、

狂ひ出すと——吃驚びつくらしただが、  
畔こうしの仔牛こうしが鳴き出す、  
わあといふ声こゑがする、  
村中で穀物しじを扱しき出す、  
ぢつとして居いらんねえ、  
俺おれちも豆まめでも撈もぎるべえ。

赤ちやけた麦と蚕豆、

ぐんぐん押しわけてゆくてえと、

たまんねえだぞ……素すつ裸はだかで、

地面ちべたにしつかり足あしをつける、うんと踏ふんばろ、——

まん円まるいお天道てんたうさんが六角むかくに尖とがつて

四方八方真黄色まへいしきに光ひかりり出す。——

そこで、俺おれちも小便せうべんをする。

赤ちやけた麦と蚕豆、

ほうれ見ろ、旦那さあが

手に一杯何だか拵げて

読んで行かつしやるだ、旦那さあ、

大けえ新聞だね、東京の新聞けえ、

紙がぶんぶん匂ふだ。

おやあ、蟬が鳴いてるだな、

どうしただか、これ、ふんとに奇異だぞ、

熟れ返つた麦途中で真面目くさつて鳴いてるだ、

あつはつはつ……これ、ふんとに不思議だぞ、

何んでも、はあ、地面にかぢりついて

一生懸命に鳴いてるだ。

夏が来ただな、夏が来ただな、

海から山から夏が来ただな。

あつはつはつはつ……

あつはつはつはつ……

### 崖の下の蚕豆畑

真赤なお天道てんとうさんが沈まつしやる……それだのにまだ、

紅べにすずめ雀すずめが鳴きしきる。

輝く崖の上の麦島、

くわつと燃え立つ杉の木、松の木、朱欒さぼんの木。

うねつた坂から、

刈穂かりほを背負せおつた大きな火の玉男をとこがをどつてゆく。

やつこらさ、やつこらさ。……

俺おれちが畑はたけは窪地くぼちの日かげ、

薄暗はたけい三角畑はたけのゆきまつり、

夜よが明けても、日ひが暮れても、陰気はたけな畑。

辣らつきよう 蕪そらまめと蚕豆そらまめと、

ずり落おちた崖土がけつちに、無性むしやう矢鱈やたらに匍はひ廻まつたお薯いもの蔓つる、

地ちがじめく、風かぜがじめく、

たまさか、真黄色まつきいろに照かへり反かへす

大船たいせんの帆かぜは見えても、

海うみも見えずよ、

愁なまじひ、波なみの音ねばかりが

ぐわうと空すきつ腹はらを搔かき廻ます、

俺おれちの畑はたけは窪地くぼちの日かげ。

真赤ましかなお天てん道どうさんが沈しずまつしやるだに、

いつまで、そん中なかで撈もぎつてるだ。

重い暗い蚕豆、

影のふかい蚕豆、

蚕豆が汝われか、さういふ俺ちが蚕豆か、

はや、訳わけがわかんねえ。

日が暮れるだあに、何時いつまで唾おほしになつてゐるだ。

影のふかい蚕豆、

青臭い蚕豆、

蚕豆さばに触さわれば、

宰さんたま丸の下から、リリリリ……

鈴虫が鳴きしきる。

やれ、痛いたや、勿もつたい体たいなや、

思おもはず拜おがめば、溜たまんねえで、

涙なみだがながるる、

ええ、畜生ちくせいめ、

なけなしの靈魂<sup>たましひ</sup>づらまでが  
光るやうだぞい、蚕豆。

青臭い蚕豆、

鬱陶<sup>うつたう</sup>しい蚕豆。

日が暮れるだあに、

いつまで撈<sup>もぎ</sup>つても撈りきれぬ蚕豆、

蚕豆は三段歩<sup>さんたんぷ</sup>、

俺ちの畑で、

俺ちが蒔<sup>ま</sup>いて、育てて、

肥<sup>こ</sup>やしたのによ、

何が鬱<sup>ふさ</sup>ぐことのあるべえ、

寂<sup>せつ</sup>しいか、切<sup>せつ</sup>ねえか、

訳<sup>わけ</sup>はわかんねえだが、涙<sup>なみだ</sup>がながるる。

小便<sup>せうべん</sup>でもしてけつかれ。

真赤なお天道<sup>てんたう</sup>さんが沈まつしやる……三崎の丘から

海のどん底まで鐘がごうんと落つこちる。

くわつと燃え立つ杉の木、松の木、朱欒<sup>しぶん</sup>の木。

麦が煽つて照りかへすと、

火のやうな裸馬<sup>はだかうま</sup>が、

や、や、や、や、や、手綱<sup>たづな</sup>を振りもぎつて崖の上を飛んでゆく、

怪我<sup>けが</sup>はしねいか権作<sup>ごんさく</sup>さん。

大丈夫<sup>だいぢやうぶ</sup>だ、大丈夫だ、大丈夫だ。

### お婆<sup>おば</sup>らが登つてゆく路

暗い坂から坂の頂<sup>てつぺん</sup>辺を見れば、

「台<sup>だい</sup>」の空火事<sup>くわ</sup>じや、野<sup>の</sup>は火事<sup>か</sup>じや。

山の段々<sup>だんだんぼた</sup>畑<sup>はた</sup>みな火事<sup>か</sup>じや。

やつこらなつさ、やつこらな。  
白髪しらかのお婆おばらがやつこらな。

もう日が暮れるぞ、危あぶないぞ、

石ころ坂ののぼり坂、

木の葉はきらめく、麓は真つ闇、

時雨はさんざと、

崖がけ土つちやこぼれる、やつこらな。

栗鼠りすの眼が光るぞ、

暗い坂、のぼり坂、山葡萄えびどろの実うが熟うれた。

涙垂なみだらすな、お勘かん婆おば、

やれ、汝われも尻拭しりふけ、お時とき婆おば、

慾よくばれ、氣きばれ、白髪染しらかぞめ塗ぬれ、お熊くま婆おば。

やれ、上見りや限りやなし、下見りや限りやなし、  
 諦めさんせの、因果なもんだよ、  
 泣いても焦れても、死ちたらお陀仏、  
 やつこらさつさ、やつこらさ、  
 長命や為まいぞ地獄の夕焼。

天竺は火事じや、世は火事じや、  
 俺らが一生はなほ火事じや、  
 やれ、もひとつくだれ、下り坂、  
 やれ、もひとつあがれ、上り坂、  
 やつこらさつさ、やつこらさ。

くわつと出た、畑に出た、  
 粟穂が真赤に。麓の女郎屋にや灯がついた。  
 畑道やうねり道

こほろぎはこほろころ、

やつこらさつさ、やつこらさ、

やれ、蜻蛉とんぼが飛んだ、火が飛んだ。

でんしんでんしんばしら  
電信柱でんしんに燃えついた。

お薯いもはころげる。畑はたけぢや逃げ出す、

追つかけて取とつちめろ、お婆おばも好きすだよ、お若いの。

ふはつはつは、いつひつひ。

てんぢく  
天竺てんぢくは火事かじじや、世よは火事かじじや、

ながいき  
長命ながいきや、耻はぢかい、地獄じごくの夕焼ゆづり、

やれ、もひとつくだれ、下り坂くだりざか

やれ、もひとつあがれ、上り坂あがりざか

やつこらさつさ、やつこらさ。

## 丘の三角畑

鋤打つ、鋤打つ、

裸で鋤打つ、

空は円天井、

地面は三角、  
ちべた

光は薔薇いろ、藍いろ、利休茶。

鋤打つ、鋤打つ、

並んで鋤打つ。

とべらの木は山形、  
やまがた

反射は三角、  
てりかへし

光は銀いろ、薔薇いろ、灰いろ。

鋤打つ、鋤打つ。

離れて彼方あちこち此方、

黙だまつて鋤打つ、

向うにライ麦、こちらに人参。

光は利休茶、緑に、こんじき金色。

鋤打つ、鋤打つ、

うしろむきに鋤打つ、

一心に鋤打つ、

打たずにやゐられぬ、

とべらの木の周囲まはりを廻つて鋤打つ。

光は薔薇いろ、空いろ、利休茶。

鋤打つ、鋤打つ、

近寄つて鋤打つ、

キラキラするのは巡査のサアベル、

畑はたけの上では蒸気が旗振る。

光は薔薇いろ、湾わんない内や真青まつさを。

鍬打つ、鍬打つ、

振りかへつて鍬打つ、

とべらの木の下ではあかんぼがすやすや、

鶏けいがコケツコツコ。

光は薔薇いろ、藍いろ、利休茶。

鍬打つ、鍬打つ、

向きあつて鍬打つ、

拝おがんで鍬打つ、

打たずにやゐられぬ、心しんから鍬打つ。

光は薔薇いろ、向日葵ひぐるま、金色こんじき。

ぎあとあかんぼが啼き出した。

## 道路

道路だうろが朱しゆのやうに蜒うねつてゆく。

南は高い粟畑ぼたけ、

重く垂れ下がった穂波がしみじみ、

雉猫きじねこの尻尾しつぽを振る、

無数に寂しく、熱あつく。

道路は照りかへる。

一方は牛蒡、人参、里芋畑、

爽かな野菜がぶんぶん、

地うねから畝うねから真まつ青さをだ。

こほろぎも鳴く。……

田舎だね、鋤をかついで、

四角な西洋館のかけから

大きな百姓の姿が躍つて来る、

顔から胸までうつぴろげて

輝<sup>かがや</sup>く秋の空をふり仰ぐ。『今日は』

もう日が暮れるのだ、老<sup>としより</sup>年の異人さんが

白いヘルメツトに、気がるな紺背広の

太<sup>ふと</sup>つ腹を突き出して、

向ふの松林を過<sup>よ</sup>ぎつてゆく、

犬が二匹火の玉見たいに飛んでゆく。

百舌が鳴く、くゐい、くゐい、くゐい、くゐい、りりり……

まん円い真<sup>まっか</sup>赤な太陽が、今、

蛭うねつて上あがつた段々畑の珊瑚樹に  
くわつと燃えあがる、——  
海には帆が光る、光る、光る。

朱のやうな道路をどが躍をどつてゆく、  
丘から丘へ、谷から畑へ、  
まるで、人間なら泥酔よつたんぼ漢ぼだ。  
それでも、しんから輝いつほんみちく一本路、  
野菜がぶんぶん、粟あわがそよそよ。

日が愈々暮れてゆくのだ、怪しい馬糞には、  
絹きぬ灑ごしの余光かへが反かへり、

露つゆが早はややしんみりと草くさつ葉はをよぢのぼる。

而しかして崖がけの暗くいかづらに

玉虫たまむしがちつと、来こて留とまつた、凄せついほど美しい凝ぎ視ようし。

## 崖

崖は梢倦みそめぬ、蔦かづらの

厚く青き悲みは満ち傾きぬ。

光は十方無碍に歎きつつ、まづ、

最上層の大きな葉にふりそそぐ。

葉は今驚く、光の重みに堪へかねつつ、

下なる円葉に照り傾く、その光

滾れもあへず、下葉の面をゆり動かせば、

その次の葉は更に強く、光り、且つ、揺れくつがへる、

葉よりは葉へ、かづらみながら

ただ燦爛と流るる如く、躍る如く。

その間も、銀の輪を画くもの

空に響く、何ともわかず、

麗らかに甘く、くるしく、湿気さへ帯びて、

その輪は次第に一点に縮まらんとす。

静けさや、かづらの葉、

光は溢れつくして、また元のままに落ちつけば、

数しれぬ鈴なりの葉もまた静まる。

時に輪は点となり、うつくしき虫となり、

光りつつ、熟視めつつ、

その中の青く青く最も厚く

光沢ふかき葉の中心にちつと留まる。

微妙端巖の緑玉。

正午すこし前

虫はいま金となる。

## 馬

不思議なる夕ゆふべかな、その光は、  
高く、熱あつく、遠をちこち近をちこちを染め、  
そして幽かすかに、  
今し、思ひがけなき坂の上に  
度つましき馬を立たす。

馬は光る珊瑚樹さんごじゆと

照りかへる村の間あひだに見ゆ。

小さく赤く、

をりをりに耀かがやくは息つけるにか。

馬は動く、いつくしく。

静かなり、ただ遥かなり。

なにももの響をか、その中に  
 馬は靈たましひかたむけて聴き入る如し、  
 金色こんじきに閃めくはその智慧ちゑか、  
 馬は赤く休やすらひぬ。

その時雲間くもまより、

大きな日輪にちりんなか半ば現はれ

遜へりくだる馬の上に虹ふりそそぐ。

赤き赤き 赤しやくきんくわう 金光。

あなあはれ、馬は焰ほのほとなる。

畏かしこくもうつくしき夕ゆふべかな、悲しき馬は  
 微妙端びめうたんごん 厳なるその馬は

見るまに不浄の五体より光を放ち

仏の如き眩まばゆきにしぼしわななく。

南無馬頭觀世音、頓生菩提。

馬は赤く浮かびあがる。

何たる法悦。馬は燦爛と天へ昇る。

## 秋の麝香

秋なり、豊ゆたかなる、搔かきわけ難たきかなしみは  
 草くさと金きんの毛け 苘きんぼうげと、  
 もろもろの悪あくの麝か香もにぞ醸かさるる。

こは路傍ろぼうなり、猫目石ねこめいしの奢ありかがやく

夕暮ゆふぐの崖がきの下したなり、

熱あつくちらばる花はなの中に、流石女さすがの

稚いとけなけれどなまめかしく、而も無むしん心に、

童わらべは薔薇色ばらいろ薄うすきシヤツをかきあげつる、

尻も真白く、

病める、悲しき、取りみだしたるその溜息<sup>ためいき</sup>。

大きな朱の太陽は空にかがやく。

凡ては歎き、小躍りし、光り、驚き、飛び去れり、  
さて芳<sup>かん</sup>ばしく鳴り響く、子供<sup>こども</sup>ごころに。

その児はこの時、叢に顔さしあてつ、

ただ一心にさしのぞく、

美しくしき譬<sup>たと</sup>へがたなき恍<sup>くわう</sup>惚<sup>こつ</sup>の奥<sup>おく</sup>の香<sup>か</sup>りを。

挑むは季節、触<sup>ふ</sup>るるは鋭<sup>えい</sup>き草<sup>くさ</sup>の尖<sup>さき</sup>、

沈<sup>しず</sup>まむとする太陽光はますます赤く。

童<sup>わらわ</sup>が髪<sup>かみ</sup>に燃<sup>も</sup>えつきて仏<sup>ほとけ</sup>の如<sup>ごと</sup>く透<sup>とほ</sup>徹<sup>てつ</sup>らしめ、

またしばし、輝<sup>かが</sup>かす、ふくらかに臀<sup>しり</sup>部の円<sup>まる</sup>みの

滑りよく、白く、冷たき肉づきを、銀のうぶ毛を。

## 墓

墓場は輝く、何かを感じず。

墓場は銀光燦爛たり。

秋なり、絶えず微風はきたる、  
麗はしき息の如く。

墓場は銀光燦爛たり。

冷やかに、よろこばしく。

草は光り、跳ねあがる、

一心の弾機。

墓場は銀光燦爛たり、  
驚きは拡がる。

そが中にただひとつ、飛び跳ぬるもの、  
そは誰が愛せし白猫ぞや。

度ましき一時、墓場は何かを感じず、  
墓場は銀光燦爛たり。

## 鱒

鱒はいま赫耀燦爛たる光に住む。  
鱒のをどるは苦しきなり。  
耀く沼は彼らを一団の焰と縮む。

深く燃え立つ 悲哀は彼らを擾す。

鱒はをどれり、葦はそよがず、

ただ朱の太陽円く閃めく。

鱒のをどるは苦しきなり、

耀く沼は彼らを一団の焰と縮む。

黒く、いみじき力重なる。

泥沼はこれ金銀瑠璃

悪の驕奢は言葉なくして

幻想界に身をうねらす。

鱒は一時に相つるむ、如何なる波も

狂へる彼らを離すことなし、

歎 楽 あまらば彼らはおのづと解けむ。

鱒のをどるは一心なり。

鱒の五感は鳴り響けり、

彼らは粗野そやなり、真しんに驚く、

鱒のをどるは苦しきなり、

彼いま燦爛かくやくたる光に飛ぶ。

## 遠樹

遠樹ゑんじゆは金の甲かぶとなり、

明あかるけれども影かげふかく

高きにゐれども眼に低し、

ただ秋風ぞ彼を吹く。

遠樹にかゝる三日の月、

遠樹にのこる昼の雨、  
遠樹の暮くれてかゞやくは、  
かうかうとしてかつ寂さびし。

遠樹のかげをゆく人は、  
身も金こんじき色しきに光るらん、  
遠樹の雨を眺むれば  
幽かすけき煙、野にぞ沁む。

遠樹の上にちらばるは、  
これ釣舟の銀かのい櫂、  
消ゆかにしてはまたいくつ、  
光りて鳥も飛びゆけり。

遠樹にかかる三日の月、

遠樹にのこる昼の雨、  
遠樹の空にわだつみの、  
波かぎりなくうちつゞく。

遠樹の赤さ、野の暗さ、  
かうかうと吹く秋の風。  
遠望ゑんぼうの中かげゆれて、  
祈るがごとし、いつくしく。

遠樹は遂に遠樹なり、  
明るけれどもゆめふかく、  
高きに動ゆらげどなほ重し、  
遠樹の背せにぞ虹にじかかる。

海  
光

## 城ヶ島の落日

太陽が落ちかゝつた。大きな大きな大火輪だいくわりんが、  
炎々えんくと思ひあまつて廻転する。

雲は微塵みぢんけ気も無いが、虚空こくうにはたゞ、  
渦うづまく黄金わうごん色の光しよくばかりが響き廻まはる。

その下に真碧まつさをな海が波うつ。輝き返る。  
無窮むへんざいに無辺際むへんざいに円く円く遙かに。

さくく、さくく、※寂ひつそりするとまた、

さくく、さくく、……

山の下では一心いつしんに誰かゞ草を刈つてゆく。

波の音にもうち消されないで、その音が  
四辺あたりに響き返る、さくく、……

刈らずにゐられないで刈る、鎌が

触りさへすれば火が出さうに動いてゆく。

夕方だし、外に人間はゐないし、全く

心の底から、力いつぱいに動いてゆく。さくく……

『風だね、まるで海がならした地面のやうだ。』

こんな上天気はこの城ヶ島にも滅多に無え。

彼岸だといふのに、暑いことはこれ、

腕も 両 足も汗でびつしよりだ。

やあ、えゝら、大かいお天道さんだなあ、

何の事、まるで朱盆をぶん廻すやうだぞ。』

男が網小屋の横から手を翳す、と海には

鵜の鳥が数百羽、

雌鳥を追っかけて一直線に翔けてゆく、

たちまち、朱の波の間に吸はれる。

くわつと四方八方が明るくなる。

不思議な日だ。たつた舟が一つ、  
前面を一心に漕いでゆく。波が飛沫しぶきをあげる。

大きな大きな人間が

くつきりと黒く、金色こんじきに浮きあがる。と、

遙かに目路めぢから細い岬とがが尖りだす。

日輪にちりんが廻まはる、廻まはる、廻まはる、恐おつそろしいほど真赤まつかな太陽が

今こそ心しんの心しんから輝く。三つ四つ五つ、

二十、三十、五十、

はては空いつぱいに飛び廻まはる真蒼まつさをな太陽の幻覚げんかく。

海を見れば海にも 団々だん／＼々々。

山を振りかへれば山には更に緑色りよくしよくの大火輪だいくわりんが 団々だん／＼々々、閃々せん／＼々々、

輝く草の傾斜けいしゃを転ころがり廻まはる。何たる壯観さうくわん。

男をとこはやつこらさと、刈草かりくさを脊負せきおつた。

幻覚げんかくが納をさまると、朱紅しゆべにのやうに

落おちつきかへつた太陽たいやうがまん円まるく、平ひらべつたく、

大きく大きく、伊豆の岬さかへ落ちる。

今まで輝あき狂くるつてゐた空そらの下したから

在ある可たき山やまが在ある可たき処ところに確た乎かと姿すがたを曳ひきはへる、

太陽たいやうが紅あかくく、その向むかふには入いつてゆく。……

悲かなしい悲かなしい底そこ光びかりの赤しや金つきん光くわう、

三さん角かくの頂ちやう点てん。

波なみが一時いちじに騒さわめて渚なぎさに寄よせる。……

而さうして何なに時ときかし何なにかを計た画かくむでゐたある力ちからが

周まはりから暗くらく、鼠ねずみ色いろに圧おし寄よせる。

灰はいと赤あかの鋸のこぎりのギザく雲くもが一ひと線すぢ、

遠とほい岬さかに曳ひきはへる、と、余よ光くわうの火くわえん焰えんが

更にパツと虚空こくうの八方はつぱうに反射はんしやする。

『愈々いよくしづ沈まつしやつたゞ、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ。』

男をとこが丘をかの上へ登りきつて了ふと、

今まで目にも見えなかつた沖の小舟が、

黒胡麻くろごまのやうにチラく、チラく、

遙かに一列いちれつ綴られてゆく、千も万も、幽かに幽かに、

——生活くつうむきが立たねば、夜よも遅くまで、

泣いて烏賊いかつる、その舟の火の、やゝありて、イルミネエション。

## 新月

断崖きりぎしの松の木に

月ほそくかゝりたり、

ほそき月、

金無垢きんむくの月。

入海いりうみの波間なみまにも

また、月はしづきゆく

沈ちん々と

金の鈎きんはり。

金無垢きんむくのするどさよ、

絹きぬ灑ごしの雨ののち、

しんじつに

走りいづるその蒼あをさ。

島黒く、海黒き

真しんの闇、

舟ひとつすゝみゆく、

そのうへにほそき月。

なにかわかね、

魚族は目をさまし、

鈴虫は一心に鳴きしきる。

度の極まり。

闇の夜は断崖も、松の木も、

かげわかず、ゆく舟も見えわかず、

ただ光るほそき月、

金無垢のほそき月。

## 鰻

金光燦爛たる夜の海のほとり、

度ましき胸壁の中、いと暗き芝生のあたり、

鰻はめぎめつ、囚はれの身より逃れて  
今こそ動け、幽かなる声の声、響の響。

空には金無垢のほそき新月、

大きなる銀星連れて走りゆく、気も澄むばかり、

その時鰻はころ転び出づ、鰻ならでは

そのうれしさを誰か知らむ、鰻はすべる。

鰻のすべるは蛇のすべるに異ならねど、

こはもと海のものなれば、陸くには馴れず、

凡て寂しく、痛いた々いたしく、草につまづき、

闇に燃え立つくれなるの花にからまる。

鰻はさあれ一心にゆり動く、驚喜のあまり、

花より花をすりぬけつ、泣かむばかりに、

現はれ歎けばをりをり金の鰻となり、  
をりをり消えては草葉の露をこぼす。

深く深く、現世うつしよに命あり叡智あるもの、  
皆真に光りいづべき縁えにしあり、ただの鰻も  
ここに万歡極まりて涙を落す。

この時彼方に燦爛とかがやくは大海の波。

静けさや、壮嚴微妙の夜の鰻、

彼こそは実げに光り滾こぼるる力の電池、

渾身これ滑すべりながるる精霊の姿そのまま、

闇を飛び越え、また、燃え立つくれなるの花を飛び超ゆ。

## 雨中小景

雨はふる、ふる雨の霞がくれに  
 ひとすぢの煙立つ、誰が生活ぞ、  
 銀鼠ぎんねずにからみゆく古代紫、  
 その空に城ヶ島近く横たふ。

なべてみな空あだなりや、海おもての面に  
 輪わをかくは水脈みをのすぢ、あるは離れて  
 しみじみと泣きわかれゆく、  
 その上にあるかなきふる雨の脚あし。

遥なる岬には波もしぶけど、  
 絹漉きぬいしの雨うちの中、蟹小舟あまをこぶねゆたにたゆたふ。  
 棹とあげてかぢめ採りるる

北斎の蓑と笠、中にかすみて  
 一心に綱うつは安からぬけふ日びの惑まじひ。

さるにてもうれしきは浮世なりけり。  
雨の中、をりをりに雲を透かして  
さ緑に投げかくる金の光は  
また雨に忍び入る。音には刻めど  
絶えて影せぬ鶴鴿のこゑをたよりに。

## 波

波は高くうねる、をりをり、  
曇つた燻銀の中から  
金の蹠をちらつかす。  
可憐に、寂しく。

白い太陽が

海の空にある。

限りもない波は波のうへに重なり、

光は光のうへに暗く、

倦怠けんたいと愁うれひが重なる。

ゆるく吹いてくる風にも、

恍惚うつとりと、

悩ましいものがある。

人間のえしらぬ句にほひが。

波がなだれる、無数の

女が仰あほむけ向になる、

ふくらかな胸が白く

幅はばいつぱい反りあがる、と、そろつて

うしろへなだれる、

も、  
股が浮く、蹠が  
きん  
金いろにちらつく。

いつまでもいつまでも、

波は波に重なり、

光は光に重なる、

かげ  
陰影の上に暗く。

波は高くうねる、をりをり

曇った燻銀の中から

きんあしのうら  
金の蹠をちらつかす、

可憐に、寂しく。

## 海雀

海雀、海雀、  
銀の点、海雀、

波ゆりくればゆりあげて、  
波ひきゆけばかけ失する、

海雀、海雀、  
銀の点、海雀。

## 海景

帆が迂る、その数が凡そ七八十、  
はじめ白く、閃閃と黄色く、赤く、  
晴れわたつた大海の真中に  
帆が迂る、自然と一つの輪が出来る。  
何時か、大きな帆の女王を中心  
遂に白く白く回転する。

その上に日光の五色の反射<sup>はんしや</sup>。

帆<sup>すべ</sup>が<sup>すべ</sup><sup>る</sup>、遙かの鋸<sup>のこぎり</sup>形<sup>がた</sup>の連山<sup>れんざん</sup>から、空には、  
薔薇いろの霞が流れこみ、夏の雲が、  
むくむくと銀と灰とに湧きあがる。

帆<sup>すべ</sup>が<sup>すべ</sup><sup>る</sup>、だんだん沖の方へ走つてゆく、

帆<sup>すべ</sup>が<sup>すべ</sup><sup>る</sup>無窮<sup>むきゆう</sup>に、無辺際<sup>むへんさい</sup>に。

藍碧の円い海が拡がる。

その間を帆が走る、輪を作つて、一斉に、

独楽<sup>こま</sup>のやうに廻り出す<sup>だ</sup>。

何<sup>なに</sup>らかの力が底<sup>な</sup>から加<sup>くは</sup>はる。

帆<sup>すべ</sup>が<sup>すべ</sup><sup>る</sup>、廻<sup>まは</sup>るうちに、帆の側面<sup>が</sup>が

何か強い力で内にひかれる……、波<sup>なみ</sup>が時<sup>とき</sup>／＼時<sup>とき</sup>、

思ひあまつて飛沫ひまつをあげる。

而も日中、晴れわたつた壮嚴さうごん微妙びめうの海に、

一心に帆が廻る。光と輪わとの舞踏ダンス。

帆すべがすべ廻る、何処どこへゆくのか、すべ迄すべつてゆく。

恐ろしい力ですべ迄すべつて行く。

密みつ集しふし、旋転し、

離れ去らむとし

今や今や廻り澄まうとして

言葉も、色も、光も、

感極たままつた靈たまの法はふ悦えつ。

帆すべがすべ廻る、何処どこへゆくのか、すべ迄すべつてゆく、

恐ろしい力ですべ迄すべつてゆく。

## 油壺

燦爛さんらんと世界が光る、さうして

深くもた黙した油壺あぶらつぼの入江いりえに

青い銀ぎんの笑わらひがはぢぎれると、また

漣さざなみは心の底から

岸辺きしべの小舟をうちゆるがす。

いつまでもいつまでもゆるがす、

不変ふへんにうつくしく。

あつ、はつ、はつ、は、

あつ、はつ、はつ、は。

ただ寂然ひっそりと、無言むごんの

大きな笑わらひが空に伝はる。……

其処には白金の日輪が小さく

ただ光つて廻るばかり、

時折、微風が翼をかへして

雪のやうに散乱する。

いつまでもいつまでもあるがなく、

いつまでもうつくしく。

裸の子供も心の底から

あづけた身体をうちゆるがす、

たつた、ひとり。纏つた舟から

迂りかかった櫓櫂が波を擦ぐる、

いつまでもいつまでも擦ぐる、

不変にうつくしく。

あつ、はつ、はつ、は、

あつ、はつ、はつ、は。

どこ  
何処かで環くわんが鳴る、

岸きしと舟ふねとを纜もやつた綱つなが、

何かの環くわんをひつぱるのだ。

心がゆらげばゆらぐほど、

小舟がゆらげばゆらぐほど、

環くわんが鳴る、何かしら鳴る。

いつまでもいつまでもたよりなく、

何かしらうつくしく。

あつ、はつ、はつ、は、

あつ、はつ、はつ、は。

さざなみ  
漣は心の底から

子供の小舟をうちゆるがす。

頭あたまの上には暗い大きな松が

むかしむかしの話をする。

その松には鳥がゐる。

いつまでもいつまでもうつくしく、

たつた一羽いちば、うつくしく。

あつ、はつ、はつ、は、

あつ、はつ、はつ、は。

小舟がゆらげばお臍へそがゆらぐ、

お臍へそがゆらげば小舟がゆらぐ、

いつまでもいつまでも恐ろしく、

いつまでもただ一人ひとり。

子供はふいと泣き出した、  
声を放つて。……

## 銃猟

燦爛と海は今光りかがやく、  
何ものぞ、空を飛び翔るは、  
ただ、これ一面のうねりなり、泣くによしなき  
銀の油の溶け合はむ、照り反さんと狂ふのみ。

凡ては眩し、痛々し、笑ふよしなし、  
小船は動き、輪に廻り、また一線に欺けども  
落ちつかむ、狙ひ射たむとぞ燥れども、

照星は照尺を超え、  
銀の櫓は日輪光に欺かる。

光りかがやく何物かまた飛びめぐる、  
きららすり雲母摺すりなる空高く、また、低く、  
おそれ恐怖は銀の翼つばさより響を拈ひげ、  
 声なき舟は一心に波に燦きらめく。

つつおと銃音響く、たま弾丸は光れり、——  
こころよて快き手ごたへは空に驚く、  
かがやき耀は矢と飛び下る。  
ぜうらん擾乱は水面すゐめんに起つ。

凡ては眩まぶし、痛々し、笑ふよしなし、  
 傷ける鳥と狂へる舟は  
くわくやく燦爛赫耀、

今こそ互に相憎め、言葉なき言葉激しく、

さてしばし、

深くひそめる鳥はまた飛び去らむとし、  
たちまちに眼をつらぬかる。

## 消防整列

玲瓏たり、燦爛たり、不尽の山、  
麗らや大海はるかに迂りあがる。

消防渚に整列し、

まづ不尽山に一礼す。

纏は金的、梯子は青竹、

てつぺん玲瓏、人間さんらん、

はつと逆さで大の字形。

耀く人数にんずはかたまりころげて

しみじみ唧筒ポムテをうち動かす。

唧筒ポムテは一台、一念、一向

唧筒ポムテの水はりうりうたり

玲瓏たり、さんらんたり、不尽の山、

唧筒ポムテの筒つぐち口りうりうたり。

水はひとずぢ、真実一心、

もつばめあて  
専ら目的は不尽の山、

弾はちき飛ばした、ぶん流せ。

よしか、それきた、

動かす唧筒ポムテは飛び切り上等。

りうりうたり、さんらんたり。

驚き飛び立つ千鳥と鷗。

それ、雪がけし飛ぶ、

愈おやま霊山が流れるぞ。

玲瓏たり燦爛たり、相模灘、

もう一息だぞ、えんやらえんや。

真実一念、十方玲瓏、

唧筒ポムツの水はりうりうたり、

れいろうたり、さんらんだり、

えんやらえんや、えんやらえんや、

消防整列、一心一向、

消けえて失なくなれ不尽の山、やあれ、やあれ、えんやらな。……

## 湾光

盥は数知れず光に動く。

盥の上には子供座れり、

裸の子供は腕をひろげて

盥を廻す。晴れわたる海の面に。

正午なり、深くひそめる

精靈の醒めゆく時なり、

銀星は空にあらはれ、

麗はしき人ごゑは湾にあつまる。

盥はしづかに迅さを増す。

盥は光れり、独楽のごとく、

一斉に、燦爛たるその飛沫。

夏なり、碧瑠璃へきるりの海は  
 円みどりく、緑の崖をうつす、  
 天心てんしんにかぐやくは、一いちの日輪にちりん。

その時ふと、笑こゑは中より起る。  
 大きく大きく、笑こゑひくづるゝ純じゆん真しん。

## 生洲

大きなる月は  
 まんまろくころ転ころび出でたり。  
 護謨ゴムの葉は豊ゆたかに動く。  
 いざや歩ふまん、二人ふたりして。

小笠原にて

生洲いけすには瑠璃るりのさゞなみ、  
 ゆれゆれて金きんの輪わとなる、

ああいまし、  
 麗うつつくしき玳瑁たいまいの雄をは  
 雌めの上にそつと重なる。

静かなれ、深く潜すめかし、  
 月はいま蒼あをき暈かききる、  
 磯いそ煙草たばこみどりにゆらぐ。

ああ、しばし  
 玳瑁たいまいは幸福しあはせに住む。

声もなし、さあれ、うつくし、  
 何物なにもか、光りとろけて

たましひ  
霊をゆするがごとし、

玳瑁たいまいはふたつ重なる。

護謨ゴムの葉は豊かに動く。

いざや眠むらん、二人ふたりして。

雜謠

## 畑の祭

大正二年九月某日、相州三崎は諸磯神明宮祭礼当日の事、上層に人形、下段にお囃子の一座を乗せた一台の山車は漁師と百姓とを兼ねた素朴な村人の手に曳かれてゆく。先づその山車は鎌倉街道から横にそれて、一小岬の突鼻の神明宮まで、黍畑や粟畑の高い丘道をうねつてゆく。而も日中、日は天心にかかつてゐる。径は緩い傾斜を登つたり下りたりしてゆく。崖の高みを行くのでその両方に真碧な海が見える。径が山車の幅より狭い位なので、松や蜜柑にぶつかつたり何かする。而して畑の上でも何でも溝はず曳いてゆく。ぶつつかる時は人形の背後に居る奴が高い処からぼきぼきと松の枝でも木槿でも手当り次第にへし折つたり、押し曲げたりする。馬鈴薯は馬鹿囃子に浮かれて大喜びだが、立樹は可哀想だ。山車が進んでゆくと、そこから神明宮と相對した油壺の入江が見え、向ふの丘の上に破れかかつた和蘭風の風車が見えてくる。その下に大学の臨海実験所の白い雅致のある洋館がある。芝生が見えキミガヨランが見え、短艇が二三艘浮いて見える。まるで南伊太利あたりの風景にでも接するやうである。愈丘の畑をすべり下りると平たい、かつと明るい渚に

出る。右も左も渚である。ここに神明宮の鳥居がある。そこから円い穏かな丘の登り道になつて、その向ふが愈海になつてゐる。社前の渚には漁船が幾艘も引揚げてある。その間であかい西瓜店や何かが出る。ここで山車を休まして、一同は赤々と日が暮れるまで盛んに酔つぱらつて踊つたり唄つたりする。中には白痴もゐるし、剽軽者もゐる。万祝衣きた大禿頭もゐる。而してここの神主は平素は三崎遊廓の検黷のお医者である。凡てが如何にも馬鈴薯式なので村の祭とか田舎とか云つたりするより却て「畑の祭」とした方が適當かも知れない。この俗謡調はその山車のお囃子として作つて見たのである。

やれやあ引、さの、せえい、せえい、せえい、せえい、せええい、

三浦三崎は女の夜業、よぼひ男後生樂寝てまぢる、

ようい、ようい、よやさのせえい。

ええ、そりや、なあ、

秋が来たぞよ、みさき三崎諸磯の段々畑から百舌が出たで、

えええ、や、ほろほにや、や、ほろほ、

くゐくゐいろいろにや、くゐろうにや。

やあれ、日はよし、地ちはよし、海や風ぐし、

今年や豊年歳、穂ほに穂ほが咲いた、

やあれ、テケテケ、チヤンチキ、チヤンチキナ、

ありやりや、こりやりや、これわいさのせえい。

五郎作よ。太郎兵衛よ、杓しやく十よ、ちよいと来なせ、

丘や畑は万作じや、おや、俺おらちの陸穂おかほもやつと熟うれた。

やれ、南瓜かぼちやも飛び出せ、牛蒡ごぼうも踊り出せ、

枝豆、隠元いんげん、ささぎ豆、

なた豆、落花生に胡麻の種、

茨さやがはぢけた、赤ちやけた、

化猫ばけねこ、雉猫きじねこ、かま鼬いたち、粟あわが尻尾しつぽを黄きに垂れた。

稗ひえは真黒、真黒、くろんぼ、玉蜀黍とうもろこしや赤髯あかひげ、赤髯毛唐人あかひげまどうじんが股ももくら毛。

蜻蛉とんぼがからんだ、蝨ばったがせ、栗鼠りすが駈かけ出す、鳶とんびがせ、

お薯いももころげ出せ、馬鈴薯じゃがいも、里芋さと、つくね芋。

子を生め、子を生め、山の芋。

こちのお鼻もどんと殖せ、  
俺ちも 壮健で、うんと肥せ、

種蒔け、種蒔け、蒔かずにやゐられぬ、蒔かねば憂さやの、子種はどつさり、畑は上々で、畝高で、

水もよくきく、肥料もよくきく、

種蒔け、種蒔け、づんと殖せ、

そこら一面鋤いて返せ。

子をうめ、子をうめ、土の芋。

やれ、その子は誰が子だ、俺が子だ、

汝ちの畑にできた子だ、

それでも誰が子か知んねえだ、

麦だか、粟だか、芋だか、稗だか、子種はどつさり、畑はひとつよ、

誰が子でもよかんべ、出来た子は俺が子。

やあれ、なあ、三崎やよいとこ、女の夜業、

ええ、風にやええ、風にや鱧釣り、夜中は寝まる、

たまに風吹きや畑うち、

うんとこしよ、どつこいしよ、

惚れたその時や命もいらぬ、

いやで別れりや離れよとままよ、

翌の晩にはまたできる、

おおさ、やれ、やれ、三崎よいとこ、男の後生楽、

子を生め、子を生め、土の芋。

やあれ、曳け、笛吹け、鉦うてよ、

太鼓どんどと打つて囃せ、

子供は真つ先、地主どんの音頭で、

花笠そろへた、団扇をそろへた、よいと曳けよ、

お婆も来、お鼻も後押せ、

畑の真中、お囃子や、チャンチキ、チャンチキ、

浮かれて、はしやいで食べ酔うて、

而も生真面目で泣いて通ろ。

やあれ、曳け、山車だしよ曳け、海が見ゆる、  
 沖はええ、沖はてるてる、風かざぐるま車は廻る、磯の神明しんめいさま様の片時かたしぐれ雨、  
 ようい、ようい、よういとなあ、  
 ええ、そりや、退すした、  
 お巡査まはりさんが逃げ出す、  
 神主かぬしさんも笑ひ出す、  
 支つかえる、支える、松の木に、木むくげ権も邪魔じやまだよ、  
 切ろやれ、捨すちよやれ、やあ、  
 蜻蛉とんぼがからんだ、蝨ばつたがせ、栗鼠りすが駈かけだす、鳶とびがせ、  
 お薯いももころげ出せ、馬鈴薯じゃがいも、里芋、つくね芋、  
 子を生め、子を生め、山の芋、  
 南瓜かぼちゃも飛び出せ、牛蒡も踊り出せ、この冥加めうがえな、  
 あれわいせの、これわいせの、この冥加。  
 さあさ、浮いた。浮いた。

## 百姓唄

逢ひたかんべ、見たかんべ、添つたらよかんべ、  
家に知れたらやかまし<sup>うち</sup>かんべ、  
世間がわるかんべ。

おさ、やれ、やれ。

何だつべこべ、惚れたがどうしただ、  
家で知つたちゆて添はずにやをかねえだ、  
世間が何だんべ。

おさ、やれ、やれ。

## 草の葉つば

草の葉つばは風吹きや<sup>そよ</sup>戦ぐ、

地からしんしん揺り動く。

一切合切さいがつさい投げいだせ、

私わたしももとより泣き上戸。

草の葉つばは雨降りや生きいる。

地までさんざと濡れしとる。

一切合切さいがつさいつぶ濡れだ、

私わたしももとより一途いちづもの。

草の葉つばは日が照りや躍る、

地から底から沁しみ光る。

一切合切照りかへせ、

私ももとより命がけ。

### 三浦三崎

その日ぐらしの山樵が

まさかりよ

斧 鉞 かついでたゞ涙。

あけび まつか  
通草も真赤にはぢきれた、

鳥もケンケン飛んでゆく、

うんとこどつこい、よいとこな。

急いで下りなきや日が暮れる。

うんとこどつこい、よいとこな。

朝は元気な船頭衆も

夕日が転がりや空矢声。

浮気な沙魚めにや逃げられる、

漕いでも漕いでも波の上、

えんやらほいほい、えんやらほい、

急いで上らにや子が喚く、

えんやらほいほい、えんやらほい。

郵便飛脚は命がけ、

いつさん走りに、豆畑、

三浦三崎にや燈ひがついた。

小便しよんべんする間まも気が揉める、

えつさつさ、えつさつさ、

急いで駆けかけなきや首が切れる、

えつさつさ、えつさつさ。

### 城ヶ島の娘

むすめ、むすめ、城ヶ島の娘、

おまへは裸で海のそこ、

朝も早うから海のそこ、

素足すあしちらちら、真逆まっさかさま様に  
波を潜もぐれば、青波ばかり。

むすめ、むすめ、城ヶ島の娘、  
鮑あはび取るとて海あはびのそこ、  
潜水眼鏡もぐりめがねで波のそこ、

あちらこちらといのちをちぢめ、  
泳ぎ廻れど青波ばかり。

むすめ、むすめ、城ヶ島の娘、  
海はしんしん、おへそはひえる。  
息がつまれど波のそこ、  
岩にべつたりしがみつく、  
しがみついても青波ばかり。

むすめ、むすめ、城ヶ島の娘、  
さぞや痛<sup>いた</sup>かる、虎魚<sup>おこぜ</sup>の針に、  
足を刺されて、揺りあげられて、  
浮いて上れど青波ばかり、  
前もうしろも青波ばかり。

むすめ、むすめ、城ヶ島の娘、  
おまへは裸で海のそこ、  
波にや揉まれる、生活<sup>くらし</sup>はたたず、  
鮑<sup>もぐ</sup>取るとして潜<sup>もぐ</sup>つて見たが、  
鮑<sup>もぐ</sup>取らいで子<sup>こ</sup>ができた。

### 城ヶ島の雨

雨はふるふる、城ヶ島の磯に、

利休鼠の雨がふる。

雨は真珠か、夜明の霧か、

それともわたしの忍び泣き。

舟はゆくゆく通り矢のはなを、

濡れて帆をあげたぬしの舟。

ええ、舟は櫓でやる、櫓は唄でやる。

唄は船頭さんの心意気。

雨はふるふる、日はうす曇る。

舟はゆくゆく、帆がかすむ。

〔『白秋詩集 第二卷』「畑の祭 補遺」より〕  
小鳥

小鳥は飛ぶ、彼はその飛ぶことすらも  
曾て悟らざるがごとし、

小鳥は飛ぶ、金色の光に飛ぶ。

小鳥はただ飛ぶ、形なき一線に飛ぶ。  
さながら翼はねつけし独楽こまの  
とめてとまらぬその迅はやさ。

かぎりなき大海の上、

ただひとつころがれる日輪の

朱紅しゆべにの円まろさ。

小鳥は飛ぶ、一線にその面めんを横よこぎる。

かなしくも突き抜けむとす。

小鳥はこの時まさしく小鳥の姿となる。



# 青空文庫情報

底本：「白秋全集 3」岩波書店

1985（昭和60）年5月7日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：飛鷹美緒

校正：岡村和彦

2012年11月24日作成

2014年4月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 畑の祭

北原白秋

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>